

●論壇

騒音の壁

高橋 寿夫*

A Wall of Noises

Hisao TAKAHASHI*

交通の発達して来た歴史をふり返ると、それは「時間」とのたたかいであったことがわかる。徒歩から始まって、ジェット機に至る長い発展過程は、いかにして短い時間で目的地へ到達できるかという努力の積み重ねであったことを疑う人はいないだろう。

そして宇宙へ飛び立つロケットとなると、残るものは光速の壁ということになり、アインシュタイン博士を引張り出さないと始末がつかないらしい。そこまで来てしまっているということは、考えてみればすばらしいことでもあり、また一面おそろしい気がしないでもない。

そこまで来てしまった推進機関の発達なのであるが、いま私たちがぶつかってしまっていて苦労している壁がある。それは音の壁である。と言ってもそれはマッハ何というような音速の壁ではなく、もっと手前の方で交通機関の前途に立ちふさがって来た「騒音」という壁なのである。

騒音の問題は、音だけの問題ではない。音が出て、その音によって影響を受ける社会の問題である。だから、音速の壁のように、これを克服するために、科学技術の分野のアプローチだけではどうにもならない。それは優れて社会的な問題である。

アメリカやシベリヤのような、人の住まない大原野を横断する場合には、別に問題にならないが、日本のような高密度居住の社会では、騒音問題というのは相当深刻である。

厄介なことには、交通における騒音問題は、交通機関の技術革新といわれる高速化と大型化の進展と大体において平行して来たのであった。

市街地の騒音では大型トラックとバスがその発生源であり、鉄道では新幹線、航空ではジェット機が元凶になっている。いずれも人智の限りを尽くして開発されたものであった筈である。

それらの高速あるいは大量の交通技術の進歩によって、人間社会は図り知れない便益を受けたのであるが、それに伴って発生した騒音問題が、今や交通機関の前途に大きく立ちふさがって来たのだ。

おそらく騒音の問題は、これからの交通機関の発達を左右する最大の問題になるであろう。交通にとって安全問題がその最も基本的なものであることは言うまでもないが、それが技術的になり解決されて来た今日において、最大の問題は騒音であると思う。

騒音問題の特徴は、それが極めて底辺の広い問題だということである。騒音を発生する交通機関の側と、それを受ける社会の側とがあって起こる問題であるというだけではない。発生源にもエンジン、ボディ、軌道構造、運行方式などのさまざまな要因がからみ合うし、社会の側でも都市構造、住居構造、生活時間帯、慣れと受忍限度などの複雑な人間的社会的要因がからみ合う。

社会の側がからんで来るので、問題の解決には、単なる技術的接近だけでは足りず、社会科学的な接近と制度論としての詰めが必要になる。まさに現代における最大の学際的研究のテーマのひとつであり、また同時に総合的な行政機能の確立の最も求められている分野であると思う。

日本の風土では、自分のタコツボを超えて手をさしのべ合うということは、本当はとてもむづかしいことなのであるが、それが出来るかどうかは、ある意味で日本の将来を占うための試金石であるかも知れない。

*運輸省航空局長

Director-General, Civil Aviation Bureau, Ministry of Transport